

会員研究

付度したのか？ 陳寿！

真野 信治

はじめに

邪馬台国、卑弥呼、狗奴国など古代日本における重要なキーワードを多く伝えてくれる魏志倭人伝。この伝を収めている『三国志』の作者は陳寿という男である。蜀漢出身であるが、晋朝に仕えていた二八〇年以降にこの『三国志』を成立させたという。この「倭人伝」の部分は、古代日本の二、三世紀

を知るうえで絶好の史書となりうるはずであるが、周知のように非常に厄介で納得しがたい伝承を含んでいる。つまり「倭人伝」の記述をそのまま信用すると邪馬台国の位置が日本列島の遥か南方海上になつてしまうことである。思わず「陳寿さん、大丈夫なの？」と問い質したくなる。この方位を東に読み替えて、大和地域に存在し

たとする説や、方位は正しいが距離表示に問題ありとして、九州島内を所在地とする説など、あらゆる解釈が可能な状況であると言つてもいい。そして、この現実離れた記述により、「所在地探し」を中心にいわゆる邪馬台国論争が勃発し、いまだに決着を見ないでいる。古くは江戸中期ごろから、新井白石や本居宣長などの国学者がこの論争を起こしている。近年では、九州説VS近畿説の二大論説に集約されており、遺跡的に見れば「吉野ケ里遺跡」VS「纏向遺跡・箸墓古墳」の様相を呈しているように見える。今や誰でも自説を唱えることが出来る百家争鳴状態なのである。しかし、どう転んでも邪馬台国の位置についての情報は、この陳寿の記述しかない。果たして陳寿は何を根拠にこの伝を記したのか、そのあたりを切り口として、陳寿本人と『三国志』編纂時における彼の動向などにスポットを当ててみたい。

一、倭人伝が収められている『三国志』とは？

陳寿が著した『三国志』は、魏・呉・蜀の三国の歴史を述べた歴史

書である。つまり「魏書」三十卷、「蜀書」十五卷、「呉書」二十卷からなり、とりあえず「正史」として認められている。倭人についての記述は、魏書の最終巻である「烏丸・鮮卑・東夷伝」の中の東夷の部分の最後に「倭人伝」として載っている（他には、夫餘・高句麗・東沃沮・挹婁・濊・韓の伝がある）。魏を正統として取り扱う類書は多いが、陳寿は表題上では三国を対等に扱い、本文もしっかり三つに分立させて編集しているところが特徴と言える。一つ気になる点は、魏が交渉を持った異種族は、烏丸・鮮卑・倭などのいわゆる「東夷」だけではなく、同様に鄯善（楼蘭）・龜茲（クチャ）・于闐（ホータン）・大月氏（クシャーン）などの「西戎」諸国の存在もあるのだが、何故かその伝の記述が全くないことである。これは決して偶然ではなく、非常に重要なポイントと考えられる。

二、陳寿の人物像

陳寿は二二三年に蜀漢で生まれたが、三十一歳の時蜀漢が魏に併合され、その二年後には魏も晋に取って代わられるという言わば激

動の時代を生きた人物である。蜀漢滅亡後、不遇をかこつていた陳寿を取り立てたのが張華だと言われている。張華はその博学の才を認められ、司馬昭の書記官からスタートし、当時は国史の編纂から、

制度・法令に関するものの一切を任されていたという。陳寿はこの張華の下で『三國志』を書き上げ、その出来栄を非常に評価されたらしい。ただ、苦勞して完成させた『三國志』であつたが、なかなか日の目を見なかつたようだ。そうこうするうちに陳寿は病死してしまふが、死後まもなく張華の働きで「正史」としての公的な地位を獲得することとなる。陳寿の人的物的評価として、「究極の空気読めない男」と指摘する研究者もいる。これは、『晋書』に書かれている「私怨により曲筆を行なつた」などの陳寿の逸話を信じてのことであろうが、実はこの『晋書』自体が史書としての正確性に問題があり、清代には綿密な考証により、陳寿に対する悪評は事実無根であるとした研究結果も出ている。いづれにしろ、禪讓にて引き継いだ晋の帝権の起源を説き、それが正統であることを証明するための著

作行為であつたと想定することは十分可能である。このことも非常に重要なポイントである。

三、俄かには信じられない魏志倭人伝の内容

倭人伝には「草木は茂盛して、行くに前人を見」ない太古の自然や、「男子は大小となく、みな黥面文身」しているその風俗や、「鬼道につかえ、よく衆を惑わす」女王・卑弥呼などの描写がある。いかにも縄文・弥生チックで、思わずその風景を空想し、ひよつとしてそんな世界もありかなと考えてしまふ。がしかし、どこまでその時代の実情を伝えているかは大いに疑問である。特に「黥面文身」は非常に気になる。

また、女王卑弥呼に対する「鬼道につかえ……」に続き、婢千人を侍らせ「宮室」、「樓觀」、「城柵」に囲まれた中で、姿を見せない王として統治したとの描写がある。ところが、『北史』西域伝女国条に「代々女性が王となり、九層の樓に住居し女数百人を侍らした」とあり、『旧唐書』南蛮西南蛮伝にも同様に「九層の重屋に女王が居し、女数百人を侍らす」との描

写がある。これを見ると、どうも女王に関して「高層建築に住み多数の女性を近侍させ政治を行う」というテンプレートがあらかじめ出来上がっているように思えてならず、もつと言えば伝承と言ふよりも、あくまでも筆者の想像の範疇なのかもしれない。したがつて、卑弥呼に關してもこの描写がどこまでが卑弥呼本人の固有情報なのか、単なる女王国に關する一般描写なのか、安易に判断は出来ない。

一方で、帯方郡から邪馬台国に至る道筋について、その距離もさることながら、国と国の間の方角も合わず、東とあるべきところが南、東北とあるべきところが東南となつているようにも解釈できる。まつたく扱いに困る描写であり、我々日本人からすれば、唯一の情報源であるがゆえに非常に残念な行程描写であることは間違いない。結局、その道里を計ると、ちょうど福建省会稽郡東冶県の遙か東に在ることになり、まともに考えれば、グアム島あたりになつてしまふと説く研究者もいる。これら一字一句すべてを信用している人は皆無であるが、どこまでの描

写が信頼でき、どこからアバウトな情報に変化してしまうかを、上手く線引きする必要があり、研究者の論点もおのずとその部分に集中しているようだ。

四、魏志倭人伝（東夷伝）が著された意図

ただ、これこそが魏志倭人伝の言おうとしたことではないか、と非常に示唆的な説を唱える研究者がいる。つまり、この倭人伝の記述から、「倭国とは、敵国呉の背後にある広大な国であり、対吳戦略上の重要な国である」ことを宣伝し、その存在意義を強調したいのだと言う。さらに距離についても、倭国の中心的な都市として描かれていた邪馬台国までの全行程が、どうしても一万七千里でなければならぬ理由があるとも指摘する。前半部分は、魏にとってこれほど戦略的に重要な位置にある倭国連合の女王が朝貢してきたのだという事実を伝えることであり、後半は、その倭国とは西域の大明氏国と同様に一万数千里以上の遠方に存在する大国であることを改めて世間に知らしめることなのだ、と説く。非常に興味をそそられる

論旨であると同時に、そう考えると、「会稽郡東冶県の東の海上」から導き出されるイメージが、なぜか「黥面文身」と重なり合うのもなかなか上手い仕込みであると思わざるを得ない（はるか南の海上にある国であれば、黥面の人々がいてもおかしくない、という当時の人々の一般的イメージが確かに存在していた）。

では、なぜ陳寿はこのような記述をしたのか？当時の日本列島に関する確かな情報をもとに著したのであるか？逆に、詳細な情報がないため、仕方なく適当に書いたのであろうか？陳寿のおかれていた立場から考えると、どうも情報があつたとは思えない。パトロンの張華などはその軍事活動から、半島及び日本列島に対する詳しい情報はかなり持っていたはずである。そこに陳寿の如何なる意図があつたのか、まず彼を取り囲む当時の人々を俯瞰してみよう。

五、陳寿が仕えた司馬家と始祖司馬懿

三国志の代表的登場人物として挙げられるのは、蜀の丞相諸葛亮（孔明）であろう。その孔明が軍

没していたにもかかわらず「死せる孔明、生ける仲達を走らす」の如く、無様な敗走をさせられたと伝わる魏の將軍司馬懿（仲達）。実際は、文官あがりの非常に狡猾な政治家であり、魏に代わる晋朝の礎を築いた人物でもある。当時

の大將軍曹真とともに魏の二代皇帝曹叡の補佐役となり、蜀漢に対する戦線で指揮を執った。一方曹

真について『三国志演義』では、無能な將軍としてひどい扱われ方をされているが、本伝では、部下

思いの優秀な将として描かれている。配下の張郃が「泣いて馬謖を斬る」の馬謖を街亭に打ち破り、最終的には曹真の戦略が諸葛亮の

第一次北伐計画を挫折させたと言つても過言ではない。このように多くの軍功があつたことは事実

なので多分本伝の方が真実に近い曹真を伝えていると思われる。したがつて、対蜀戦においても前半

は曹真の功績の方が目立ち、それに比べて司馬懿の方はそれほどでもない可能性がある。それよりも、後年の公孫淵討伐を完遂し、遼東の制圧に成功したことの方が司馬懿の最大の功績と言えるだろう。その後、曹真の子息曹爽の死

を契機に、司馬懿は最終的に魏における全権を握ることとなるが、ほどなく死去してしまう。後に孫の司馬炎が魏より禅譲を受けて正式に皇帝となり、晋朝を起こすことになる。

ところで司馬一族に仕えていた張華をパトロンにもつ陳寿が『三国志』を実際に執筆していた時期は、二六〇年代後半から二八〇年

くらいと思われる。彼としては、魏の後半部分の国史を書く上で、

どうしても曹真・曹爽親子と司馬懿の実績を比較しながら記述していた可能性は大いにある。その際、

当然のごとく司馬懿の功績を華々しく誇張する必要に迫られていたことも想像に難くない。それは今はやりの「付度」なのであろうか。

いざれにしろ、当時成立していた晋王朝を正当化するためにも、少なくとも始祖の司馬懿のイメージをできるだけ名譽あるものにする

よう付度する必要は確かにあつた。また、陳寿にとつてはこれが唯一の身を守る術であつたのかもしれない。したがつて、倭国伝を含む「東夷伝」の描写は、司馬懿の功績を中心に仕掛けられたものであるとの説は、納得しうるもの

である。

六、西域の大月氏国と比較された東夷伝の倭国

ところで、「魏書」には東夷伝があるのになぜ西戎伝がないのか。同時代の『典略』はしつかり「西戎伝」を立てているので、西域に関する情報が欠如していたとは思えない。したがつて「魏書」にそれが無いのは、はなはだ不審であり、構成上、ややアンバランスな出来と言わざるを得ない。やはりここにも陳寿の「付度」が見え隠れしていると云つてもいい。

当時西域の代表的国家と云えば、やはり大月氏国であろう。魏は、二二九年、大月氏王のヴァースデーヴァに「親魏大月氏王」の金印を与えているが、ヴァースデーヴァの使節を招き寄せたのは、例の曹真であり、その功績は大であつた。さらに曹真のメンツを立てた結果、大盤振る舞いにて「親魏大月氏王」の称号を与えることとなつたわけだ。一方で、ライバルであつた司馬懿も負けるわけにはいかない。二二九年、司馬懿の演出により朝貢してきた倭王卑弥呼に同格の「親魏倭王」の金

印・紫綬を与え、結果、對抗馬である曹真・曹爽に一矢を報いる形となった。ただその際、司馬懿・曹孟徳である陳寿は、司馬懿の功績を称えるために朝貢の記述にとどまらず、倭国（邪馬台国）を大月氏国と同等かそれ以上の大国に作り上げねばならない使命をも感じていたのである。

七、陳寿が捏造したと思われる数値

具体的に見てみよう。『統漢書』には大月氏と洛陽の距離を「万六千三百七十里」としている記述がある。陳寿はその首都であるカーピシー城と倭国の中心邪馬台国が同じような「遠さ」になるよう捏造した。つまり帯方郡から邪馬台国まで一万二、三千里とし、洛陽から帯方郡までの五千里を加えるところより一万七、八千里となり、釣り合いが取れる。さらに一万二千里とした意図はもうひとつあって、二、三九年卑弥呼の朝貢盛儀の公報に「帯方郡より一万二千里」と明記されており、これが既成事実であったため、この里数は外すわけにはいかなかった。そうなる

と、今度は朝鮮半島の大きさも捏造せねばならず、帯方郡（現在のソウル）から東南端の狗邪韓国までを七千里としてしまい、結果、あまりにも巨大な半島が出来上がってしまった。ただ、そうしないと邪馬台国まではとも一万二千里にならないからである。つまり、実際の距離はどうでもよくて、最初から一万七千里ありきの話であったわけだ。

さらに、首都カーピシーには十万余戸の戸口があったとされる。陳寿は、その行程から順に対馬国、一支国、末慮国、伊都国、奴国、不弥国、投馬国、邪馬台国を合わせて十五万余戸になると記すことで、十分首都カーピシーを含めた大月氏国全体に匹敵する戸口があったことを強調した。これも捏造と見なすべきか。因みに、その中でも邪馬台国の戸口は七千戸と記されるが、なんとこれは当時の洛陽の戸口と同等であると言われている。倭国の中心的都市である邪馬台国とは言え、さすがに大都市洛陽と同じ規模だったとは、俄かには信じられない。これも始めから七千戸ありきだったのかもしれない。こうしてみると、朝鮮半島も含め倭国（邪馬台国）に関わ

るすべての数値は、大月氏国と比較した結果、それらと同等の数値になるように捏造されたと思える。これもおかしくない。

八、付度した陳寿の狙い

もうすでにおわかりと思うが、作者の陳寿は「烏丸・鮮卑・東夷伝」を著すうえにおいて、晋朝の礎を築いた司馬懿とその一族に対し、付度して次のような狙いで編纂を進めたと推測できる。

- ・二六五年に始まる晋朝の帝室の権力の起源を説明するために、晋朝の事実上の創立者であった司馬懿を必要以上に持ち上げること。
- ・その反面、政敵であった曹真・曹爽親子（特に曹爽）の功績は必要以上に伝えないこと。
- ・編纂中であつた「三國志」の中に、司馬懿の東夷征伐に対する輝かしい功績を盛り込むため、異常なまでに詳しい「東夷伝」をつくること。

・その中で特に、司馬懿の演出で朝貢してきた女王卑弥呼が治める邪馬台国を含めた倭国全体がいかにかに大國であつたかをアピールし、その周辺についての記述も充実させること。

・加えてその倭国を、当時の敵國である呉の背後に存在する大國であることを匂わせ、政治的にも非常に重要な國であることを強調すること。

・政敵、曹真の尽力により朝貢してきた西域の大月氏國の「遠さ」と「大きさ」を念頭に、司馬懿の関わった倭國（邪馬台國）も同等かそれ以上の国力になるようそれぞれの数値を捏造すること。

・加えて、曹真と關係が深い大月氏國を含め、魏との交渉があつて曹真の手柄になりそうな他の西域諸國を記す「西戎傳」はあえてつぐらないこと。

まとめ

以上、陳寿が付度して創り出したとみられる「烏丸・鮮卑・東夷伝」中の倭人伝執筆の確固たる狙いを、箇条書きにして整理してみた。つまり、魏朝と倭國との間の政治的關係が如何にあつたかの記録を伝えることが主目的だったのである。したがって、倭國の方面・距離などは、大月氏國に相当する里数を代入しただけで、単なる付け足しに過ぎないと指摘する先学の主張には、十分肯ける。邪

